

# 和光市における移動図書館の歩み

## ーインタビュー調査中間報告ー

中岡 貴裕・石川 敬史

### 1. 研究の視角と目的

移動図書館とは、「公共図書館が図書館を利用しにくい地域の住民に対して、何らかの移動手段を用いて図書館資料を運び、図書館員による図書館サービスを提供する方式」<sup>1</sup>である。最も代表的な移動手段はトラックやバスを改造し書架やスピーカーを装備した自動車であり、日本図書館協会による『日本の図書館：統計と名簿』によると2018年に全国で538台の図書館車<sup>2</sup>が地域を走っている。本稿における移動図書館とは、こうした自動車による移動手段を用いた活動を指すこととする。

日本における移動図書館の先駆けは、1949年9月に巡回を開始した千葉県立中央図書館の「訪問図書館ひかり」<sup>3</sup>であった。さらには、移動図書館「ひまわり号」1台から図書館を「開館」（1965年9月）し、当時の公共図書館を大きく変革させた日野市立図書館の活動<sup>4</sup>も全国各地の図書館に大きな影響を及ぼした。こうした自動車には、個人貸出や書架の公開（千葉県）、全域サービスや貸出、児童サービスの重視（日野市）など、当時の図書館の目指す姿が体现されていた。これまでの移動図書館の台数をみていくと、1997年の697台をピークに増加していたが、以後減少が続いていく<sup>5</sup>。しかし、東日本大震災（2011年3月）以降、移動図書館は再評価される傾向にあり<sup>6</sup>、台数の減少は比較的緩やかになっている。

他方で、近年、日本の戦後史・地域史研究において、地域に暮らし関係性を育む人々の経験に焦点をあて、戦後日本の地域社会形成過程を考察する研究がみられる。例えば、鬼嶋淳は埼玉県の入間地域を中心に、戦後地域社会の形成

を対抗関係の変化を軸にして詳細に検証している<sup>7</sup>。森武磨らは、1950年代における都市と農村の重層的関係、さらには共同性と協同性に着目しながら、神奈川県小田原地域を中心に地域社会の再編を検討している<sup>8</sup>。これらの研究は、激動の戦後地域社会を動的にとらえる視角によって考察されている<sup>9</sup>。

これに加えて、大門正克は、地域に暮らす人々が生きるための関係性を矛盾や葛藤の中でどのように創り出したのか、という「生存」や「生きること」に着目している<sup>10</sup>。大門は「生存することは人と人のつながりのなかにあるのであり、生存すること自体のなかに他者に働きかけるきっかけが含まれている」<sup>11</sup>とし、人々が生きる地域社会の重層的な相互関係を指摘している。

本研究で対象とする埼玉県和光市は東京都練馬区と板橋区に接する埼玉県南部に位置し、都内への交通アクセスも非常に良い。30－40歳代の人口が最も多く、現在も和光市の人口は増加し続けている<sup>12</sup>。和光市の歴史を遡ると、1952年には本田技研工業株式会社の大規模工場をはじめとする工場の進出、さらに1965年以降は西大和団地や諏訪原団地など大規模な公団住宅が建設され、統計上の夜間人口が増加するとともに、転入者と転出者の増加という人口流動の激化も顕著になった<sup>13</sup>。1970年に大和町から和光市へ市制が施行した後も人口が増加し続け、小中学校の増設も進められていく。

しかしながらその間、教育費に占める社会教育費はわずかであったという<sup>14</sup>。例えば公民館については、1953年に大和町公民館の設置以降、1961年の白子分館、1962年の新倉、吹上、牛房の各公民館の設置と続いていくが、図書館

をみていくと、建物の図書館の開館ではなく、1973年の移動図書館「やまびこ号」の開館から始まる。和光市における図書館は公民館の図書室に限られていたが、地域住民の「和光市に移動図書館をつくる会」による運動・請願を背景に「やまびこ号」1台から図書館が開館した歴史があった<sup>15</sup>。

本研究では、戦後期に地域社会が大きく変動し、かつ地域住民の運動・請願によって1台の移動図書館から開館したという特徴を有する和光市を対象に、当時、移動図書館の巡回を担った図書館員、さらには移動図書館を要望し、移動図書館活動を支えた地域住民らが、移動図書館に何を求め、何を期待していたのかを検討する。本稿では、こうした研究の中間報告と位置づけ、当時「やまびこ号」の巡回を担っていたかつての図書館員の方々を対象としたインタビュー調査<sup>16</sup>にもとづき、当時の資料を用いながら和光市における「やまびこ号」の歩みを実証的に検討する。こうした検討は、移動図書館を媒介に、戦後地域社会における人と人との相互関係や共同性の考察に結びつけることができるとともに、移動図書館に対する運動と実際の巡回が戦後の地域社会の形成においてどのような位置を有していたのかを明らかにすることができる。

## 2. 「やまびこ号」の歩み

### 2.1 インタビュー調査

和光市における移動図書館「やまびこ号」の歴史を実証的に検証していくにあたり、資料の収集・検討とともに、実際に「やまびこ号」に関わってきた人々へのインタビュー調査は重要である。本稿では、2019年に実施したインタビュー調査のうち和光市の元図書館職員（2名）によるインタビュー調査を対象に、収集した資料も踏まえながら「やまびこ号」の歩みを中間的に報告する<sup>17</sup>。なお、2名へのインタビュー項目はそれぞれ個別に設定したが、本稿で掲載

したインタビュー記録については、内容を整理・抜粋するとともに、年表記は西暦で統一した。なお、インタビュー記録の詳細は、今後、本研究の報告書としてまとめる予定である。

本稿が対象とするインタビューの日時や対象者、略歴については、次のとおりである。

#### (1) 柳下昇氏インタビュー

日時：2019年2月4日（10：00－12：00）

場所：和光市図書館会議室

柳下氏は「やまびこ号」が巡回を開始した翌年度（1974年4月）に和光市職員となり、和光市中央公民館図書室に配属。「やまびこ号」の運転業務等も担当した。その後、社会教育課や総務課など市役所内の異動を経て、和光市図書館長、再任用職員として図書館業務に携わった。

#### (2) 海老原伸子氏インタビュー

日時：2019年8月4日（13：00－15：00）

場所：アルコイリス（和光市内）

オブザーバー同席：茂呂あかね氏（和光市教育委員会）

海老原氏は1973年8月に和光市職員となり、和光市中央公民館図書室に配属され約10年勤務。司書の有資格者。以後、和光市図書館が開館（1983年8月）した後は同館において約10年。通算約20年間図書館業務に携わった。

### 2.2 「やまびこ号」前史

和光市の移動図書館「やまびこ号」の開館式は1973年12月17日に行われ、翌18日から市内の巡回を開始した。「やまびこ号」が巡回を開始した当時、和光市には図書館は存在せず、その機能は中央公民館の図書室が果たしていた。

中央公民館図書室の開館は、市制以前の大和町（現・和光市）であった1962年8月23日にさかのぼる。大和町の中央公民館図書室については、当時の大和町の広報誌『広報やまと』において、「あなたの家庭の書斎のように公民館の図書室を、どうぞどしどしご利用ください」<sup>18</sup>と触れられているように、小規模ではあるが少

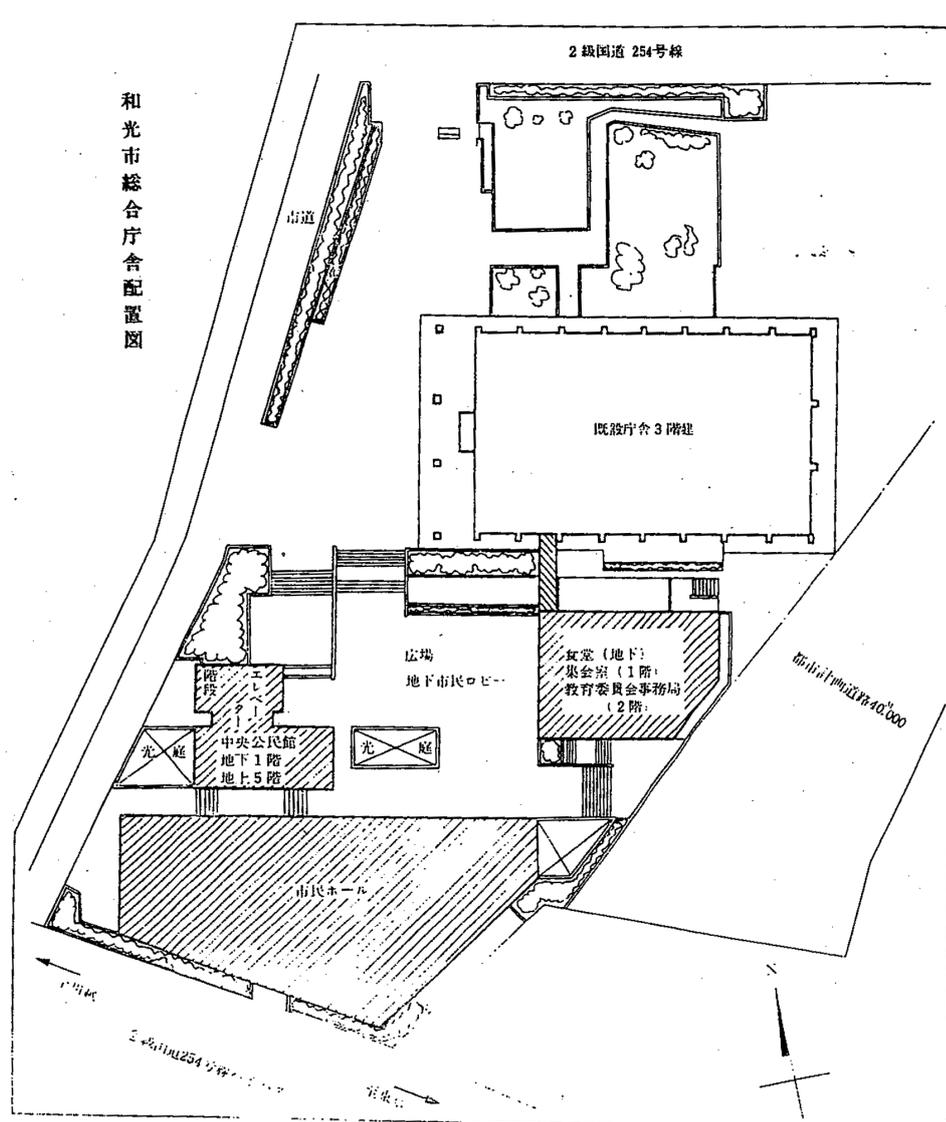


図1 和光市総合庁舎配置図  
 (『広報わこう』13号 1971年5月1日 p2より転載)

しずつ図書館としての歩みを進めていた。

その後、中央公民館は新たに建設される総合庁舎内に移転するため、1970年12月26日をもっていったん休止し、総合庁舎に移転した1971年6月1日から活動を再開した(図1、図2)<sup>19</sup>。中央公民館の新たな図書室は3階に設置され、24の閲覧席、閉架書庫を含め約5,000冊が収容できる規模の図書室であった。1983年8月に現在の和光市図書館が開館するまでの間、この中央公民館図書室は和光市の図書館機能を担っていた。

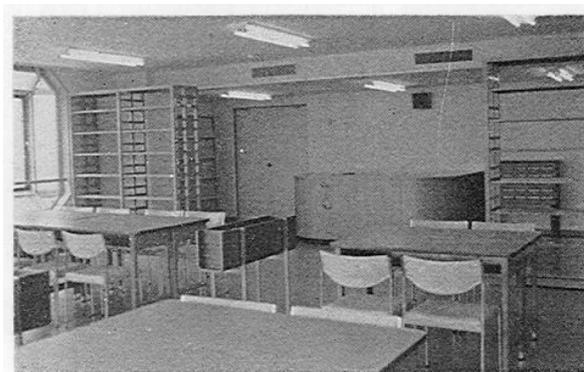


図2 和光市総合庁舎内の中央公民館図書室  
 (『広報わこう』13号 1971年5月1日 p6より転載)

## 2.3 「やまびこ号」と請願活動

総合庁舎に中央公民館図書室が移設されたものの、和光市には図書館は存在しない状況が続いた。こうした中で、1972年11月末に市民が主体となって「和光市に移動図書館をつくる会」が発足した<sup>20</sup>。同会は「身近なところに本があり、市民のだれもが平等に、より多くの図書を利用できるように」という願いを込めて請願署名運動に取り組み、「市内15ヶ所に図書館バスを走らせましょう」というチラシ(図3)<sup>21</sup>も作成された。そして、同年12月9日に市議会に対して3,513名の署名を添えて請願を提出した。このように、和光市の市民による移動図書館を求める請願活動は、「やまびこ号」の歴史において重要な出来事であったことがわかる。

海老原：県立の一日図書館「むさしの号」<sup>22</sup>がまずあって、そこから請願活動が始まったんでしょね。あの頃の市民運動はすごかったですよ。

茂呂：時代もあったんでしょ？和光市に限らず。

海老原：ええ、そういう時代でしたね。

中岡：請願活動をされていたのは団地に住んでいる方で熱心な方がいたと聞いています。その方が中心でしょうか？

海老原：そうですね。熱心にいろいろなことをやっていました。諏訪原団地の家庭文庫とかやっていたらしてね。

中岡：請願の代表者としてお名前を目にしました。あとはご本人が文章を書かれているんです。

石川：この『月刊社会教育』の記事<sup>23</sup>ですね。

海老原：そうなんだ。すごいですね。当時、職員で中央公民館の社会教育主事の方がいらしたんですが、おそらくその方と一緒にいろいろ活動されていたのではないかと想像はできますね。

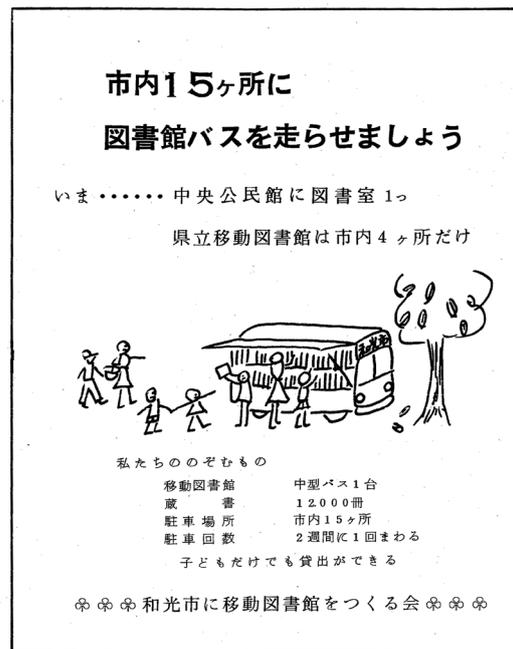


図3 和光市に移動図書館をつくる会によるチラシ  
(『くらしのなかに図書館を 一埼玉県立公立図書館白書 1973—』p14より転載)

## 2.4 名称とテーマソング

請願が市議会に提出され、それを受けて和光市は移動図書館をつくることとなった。1973年8月15日の『広報わこう』には車名とテーマソングを公募する記事があり、移動図書館開館に向けた準備が進められていることがわかる。続く同年11月15日の『広報わこう』には車名が「やまびこ」、テーマソングを「手のひらを太陽に」とすること、ステーション<sup>24</sup>は14ヶ所になることが報告されている。ここでは「やまびこ」という命名の由来について、「この移動図書館の活動が、明るい太陽のもとに、やまびこのように地域のすみずみまでこだましあい、市民のみなさんの読書活動が活発に進展し、創造的でゆたかな文化都市の建設に寄与することを期待して命名されました」と記されている。

茂呂：移動図書館のステーションは何か所でしたか？

海老原：最初は14か所でしたね。

中岡：諏訪原団地へは県立の一日図書館がいっ

ていましたね。

茂呂：一日仕事だったのでしょうか？

海老原：県立図書館は一日仕事です。「やまびこ号」は半日仕事です。午後に2ヶ所いきます。

茂呂：音楽（テーマソング「手のひらを太陽に」）をかけて出かけていたのですか？

海老原：そうです。ステーションの近くに行くとテープをかけます。

石川：音楽は公募だったのですか？「やまびこ号」という名称も？

海老原：当時の広報で募集していましたね。

中岡：テーマソングの「手のひらを太陽に」というのは、歌詞付きのメロディーを流していたのでしょうか？

海老原：いやいや、歌詞はつかないですね。カセットテープで歌詞がつかないものです。

中岡：巡回をはじめてからずっと同じ曲ですね。

海老原：そうです。「やまびこ号」の名前の由来は、坂が多いから「やまびこ号」になったという気はします。

中岡：当時の広報誌で「やまびこ号」の名前などが決まった時の記事があるのですが、どのように決まったのかは書かれていないですね……。

茂呂：両方とも公募したのでしょうか？

海老原：両方とも公募でしたね。そういうやり方も、公民館職員で経験のある方のアイデアだったのではないかと思いますね。最初から市民と一緒にやっていくというやり方です。



図4 やまびこ号外観

(『埼玉の移動図書館 1977』 p28 より転載)



図6 やまびこ号巡回開始を伝える『広報わこう』(1)  
(『広報わこう』78号 1974年1月15日 p1より転載)



図5 やまびこ号開館式の様子を伝える『広報わこう』  
(『広報わこう』77号 1974年1月1日 p5より転載)



図7 やまびこ号巡回開始を伝える『広報わこう』(2)  
(『広報わこう』78号 1974年1月15日 p2より転載)

## 2.5 やまびこ号の製作と巡回開始

「やまびこ号」は、株式会社林田製作所（大宮市：現・さいたま市）において製作された。車両は日産のシビリアン（マイクロバス改造）、書架装備を内外にもち、積載図書数は2,200冊という記録がある<sup>25</sup>。完成した「やまびこ号」（図4）は、1973年12月17日に開館式が行われ（図5）、翌18日から市内の巡回を開始した（図6、図7）。「やまびこ号」の利用資格は市内在住・在勤者であり、利用冊数は1人3冊まで、貸出期間は次回の巡回日までの2週間とされた<sup>26</sup>。

中岡：海老原さんが採用された頃（1973年8月）は、まだ移動図書館の本体はできていなかったですよ？

海老原：本体はできていなかったと思います。購入の予算はついていて、ニッサンシビリアンを改造すればよかったです、意外と早くできました。1973年12月には巡回していました。

石川：ちょうど自動車納品された頃についてのご記憶はありますか？

海老原：新車が納品されました。駐車場がないから市役所の玄関のところにとまりました。前の市役所の正面玄関はいるとすぐ噴水がありました。その玄関のすぐ外に停まっていたので、市民の目に一番とまるから、PRにもなりました。

茂呂：その後も、「やまびこ号」は普段からそこに停まっていたんですか？

海老原：ずっと停まっていました。

石川：屋根はないところでしょうか？

海老原：そこには屋根というか市役所の玄関先なので屋根のようなものはありました。住宅公団の大きな団地ができて、そこに新しい住民がどんどん入ってきて、社会教育的な活動が爆発的に進んでいきました。そのときの市長が柳下市長で、福祉と教育に力を入れるんだといっていました。

## 2.6 職員の体制と「やまびこ号」の巡回

和光市内を巡回する移動図書館「やまびこ号」は、中央公民館図書室の職員によって運営されていた。1983年に和光市図書館が開館するまでの中央公民館図書室の職員体制は、基本的に3人であった。「やまびこ号」の巡回にあたっては2名の職員が担当していたという。

海老原：移動図書館が開始するということで、私が1973年8月に職員に採用された時は、中央公民館図書室の職員は1人いました。あとパートの方が1人です。1974年1月に運転のために職員1人が新規採用されました。1月からは職員3人体制で、パートの方は辞めました。その後は職員3人体制で図書館が開館するまで、ずっとやってきました。以前からいた経験のある職員の方も途中で退職したり、他の職員2人も異動で何人かは変わりましたが、私はずっと、公民館図書室と移動図書館の業務を行ってきました。

石川：ずっと3名の方で、運転する方と同乗する方という体制で運営していたのですよね。

海老原：そうですね。3人体制で運営していました。中央公民館図書室と移動図書館をね。

中岡：やまびこ号は、普通免許で運転できたんですよ？

石川：でも、普通免許で運転しろと言われてもなかなか難しいですよ？

柳下：慣れるまで先輩に教わりながらね。

中岡：マニュアル車ですよ？

柳下：そうです。

石川：車は大きいですしね。ちょっと運転してといわれても抵抗感がありますよね……。

柳下：だから、道路の左側に白い線が引いてありますよね。あれが頼りです。こっちのミラーで白い線のギリギリのところを走って。でもバックが一番いやだったね。特に小学校なんかでバック帰るときはいやだったね。だれか

に後ろを見てもらわないと怖いよね。

中岡：ルートなどはどのようにして決めていましたか？

柳下：その日に行くステーションは決まっていたけど、ステーションに行くまでのルートは決まっていなかったですね。ステーションに行くまでに、「この辺ならこれくらいかな」という範囲のあたりで音楽を流して走行しながらステーションに到着するようにしていました。ステーションで広報するのではなく、到着するまでに広報するわけだから、たまにはこっちのほうに行ってみようかということもありました。

中岡：「やまびこ号」にはスピーカーがついていたのですか？

柳下：ついてました。

中岡：声でお知らせしたりとかもされたり？

柳下：「手のひらを太陽に」の音楽だけだと思います。

中岡：走行中ずっと流していたのですか？

柳下：ステーションの付近になってからだね。そうしないと、どこのエリアだかわからなくなってしまいうから。停まるエリアのあたりになってから流してましたね。走行中は大きい車だったから、狭い道に入ると屋根が引っ張っていたり看板が引っ張っていたりするから、注意してましたね。

## 2.7 ステーションと世話人

「やまびこ号」のステーションは、当初 14ヶ所が設定された（図8）。その後、埼玉県立図書館による一日図書館「むさしの号」による巡回の終了や、和光市内に新たな公民館図書室が開設する中で、「やまびこ号」のステーションは、場所を変えながら巡回することとなる（図9）。

加えて「やまびこ号」は、ステーションごとに「世話人」と称する市民の方々によって支えられていた。この世話人は、「やまびこ号」巡回当日に貸出や返却等の作業を担うため、和光市教育委員会からステーションごとに1～4人委

## 移動図書館駐車場

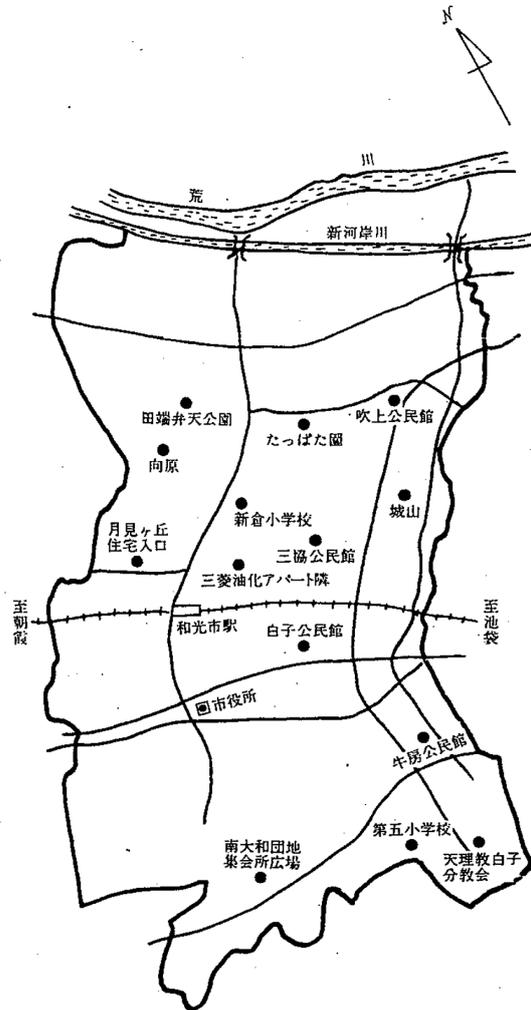


図8 巡回開始当初の「やまびこ号」駐車場位置図  
 (『広報わこう』78号 1974年1月15日 p3より転載)

嘱された<sup>27</sup>。

中岡：地域の世話人の方はどのような活動をされていましたか？

柳下：貸出、返却ですね。とにかく手作業だから。

石川：世話人の方はどのように選ばれていたのでしょうか？地元の自治会などから選ばれたりなど？

柳下：地元の顔が見える人でしたね。どのように選ばれたのかはわからないけど。みんな良い方々でしたね。

石川：ステーションに「やまびこ号」が行くと世話人の方がそこにいるわけですか。

柳下：そこで待っていてくれましたね。

図9 移動図書館「やまびこ号」ステーション変遷図

ステーション名	S48年度 (1973)	S49年度 (1974)	S50年度 (1975)	S51年度 (1976)	S52年度 (1977)	S53年度 (1978)	S54年度 (1979)	S55年度 (1980)	S56年度 (1981)	S57年度 (1982)	S58年度 (1983)	S59年度 (1984)	S60年度 (1985)	S61年度 (1986)	S62年度 (1987)	S63年度 (1988)	H7年度 (1989)	H8年度 (1990)	H9年度 (1991)	H10年度 (1992)	H11年度 (1993)	H12年度 (1994)	H13年度 (1995)	H14年度 (1996)	H15年度 (1997)	H16年度 (1998)	H17年度 (1999)	H18年度 (2000)	H19年度 (2001)	H20年度 (2002)					
新倉小学校	12月から		S51年3月 末で廃止																												4月から				
諏訪原団地		4月から													S63年3月 末で廃止																				
西大和団地				4月から																															
南大和団地	12月から																																		
城山 →白子小学校	12月から	9月から 白子小学 校																																	
向原 →にいくらの保育園	12月から																																		
三郷湖北アパート隣	12月から																																		
吹上公民館 →和光公民館 →吹上公民館 →東明寺境内	12月から		5月から 和光ポ ール	8月から 吹上公民 館					7月から 東明寺境 内																										
白子公民館 →白子ミニユニ ティセンター	12月から										5月から 白子コミ セン																								
田端弁天公園 →新倉水川神社下 →赤池堤遊歩園 (公園)	12月から					4月から新 倉水川神 社、7月か 赤池堤遊 歩園	2月から 赤池堤遊 歩園																												
月見ケ丘住宅入口 →勤労青少年ホ ム	12月から		6月から 勤労青少 年ホーム																																
第五小学校	12月から																																		
天理教白子分教会 →白子丁目 たつばな園 →大島 →東本村集会所	12月から																																		
牛原公民館 →牛原ミニユニ ティセンター	12月から		9月から 大島		7月から 東本村集 会所						10月まで 廃止																								
三協公民館 →協和会公民館 →協和会集会所	12月から				10月から 協和会公 民館						5月から 4号コミ セン																								
二軒新田																																			
DKマイン →南越の上 和光パークファミ リア →南滝河原																																			
谷津ステーション																																			
第四小学校																																			

【凡例】

- ・各移動図書館が巡回している年度はグレーで表現している。なお、ステーション変遷は『広報わかこ』の各年度を参照して作成した。
- ・ステーションの名称が変更された場合、または廃止に伴い付近に代替のステーションが設定された場合は、元のステーション変遷の中に記載している。
- ・「やまびこ号」は、2003年3月をもって廃止となっている。

石川：机を出してくれるなど……。

柳下：そうそう。それでその人たちと世間話とか、井戸端会議みたいなお話をしながら楽しくやりましたね。

石川：貸出が相当な量になると、人が殺到するので、大変だったのでは……。

柳下：そう、ごちゃごちゃしてね。子ども向けの本は車内で、全員が中に入れないので「並んでー」といったりとか、そういう人の整理になんかは自分たちがしたりとかしました。

石川：ステーションで手伝ってくれる方は毎回同じ方でしたか？

海老原：同じ方でしたね。

石川：広報にお名前が載っていましたね。

海老原：自治会に頼んだのか手を挙げてもらったのか、どうやって決まったのかはちょっと記憶にはないのだけど……。地域と一緒にやっていくというのは良いですね。とても良いやり方だったと思います。

……（略）……

茂呂：時間になると世話人の方々は現地で待っているのですか？

海老原：そうです。貸出なんかもやっていただいて。職員は見ているだけだったり（笑）。その方々が地域の子どもたちに声をかけたり、本を探すのを手伝ったりして。

茂呂：地域の方がそれだけ熱心なんですよ。

中岡：広報によると、世話人の方は数年後に代わったりされてますね。

海老原：そうでしたね。それで人数も変わっていったと思います。

石川：世話人同士でほかの地域の方との交流などはありましたか？

海老原：それは無かったと思いますね。

石川：行ってみたらステーションにいなかった……。なんてことは無かったですか（笑）。

海老原：それは無かったですね。でも、和光市図書館ができるころになると、「やまびこ号」の世話人の方はいなくなっていったような気がします。

石川：こういう制度を考えたのも、先ほどの経験のある職員の方でしょうか？

海老原：おそらく。そうだったのではないかと思います。市民と一緒にやっていくというね。そういう時代でしたね。

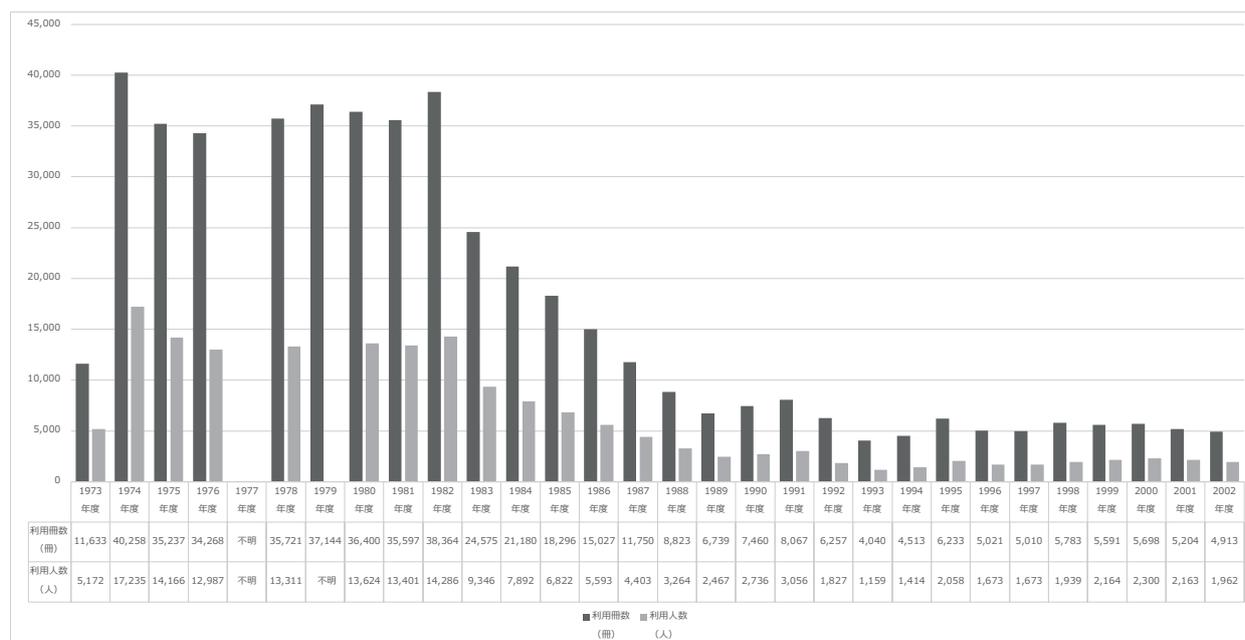


図 10 移動図書館「やまびこ号」利用推移

※『和光の教育』の各年度、『埼玉の移動図書館 1977』、『埼玉の移動図書館 25 周年記念号』、『埼玉の移動図書館 1981』による。

## 2.8 移動図書館の利用者

「やまびこ号」の利用者数は図 10 にまとめたとおりである。なお、1977 年度の統計は現時点で確認が取れていないため空白としている。確認できる記録の限りでは、開始翌年度にあたる 1974 年度に利用冊数、利用人数ともに最高値を記録している。その後、おおむね順調に推移するものの、1983 年度から急激に利用者、貸出冊数ともに減少していく。この減少の理由にはさまざまな要因が考えられるが、一つには 1983 年 8 月に和光市図書館が開館したことが影響しているといえる。

中岡：ステーションごとによく来る利用者さんの記憶などありますか？ 利用者さんと良くしゃべったり……。

柳下：話した記憶はあるよね。いろんな人が来てました。

石川：全体的には子どもたちが多い印象ですか？

柳下：そうですね。小学生ですね。

石川：大人の方の利用となりますと、女性が多いでしょうか？

柳下：そうでしたね。小さい子と一緒に乳母車とか、子どもを抱いてきている人もいたし。団地に行くと主婦が多かったです。

石川：ステーションによって、子どもが少ないとか、ご高齢の方が多いとか、男性の方が来ていたなどの印象はありますか？

柳下：男性は少なかったね……。

中岡：「やまびこ号」の利用者さんは、どのような方々だったのでしょうか？

海老原：利用者さんは、やっぱり子どもとお母さんですかね。午後、子どもが帰ってくるくらいの時間だから。

茂呂：あの頃は絵本ブームでしたよね。今でも読む子はもちろんいるけれど、あの頃はどんな子でも絵本を読んでいたような気がします。定番絵本ってあったじゃないですか。今

の定番絵本の出だしのころですよ。だからやっぱり盛り上がっていたのかなあ。

海老原：ええええ。盛り上がっていたよね。

石川：貸出方法はブラウン式？

海老原：そうです。ブラウン式。なつかしい言葉ね。ポケットにハンコを押して。

茂呂：それだとジャンジャンお客さんがきちゃうと……。

石川：最初は列になってしまいますよね。

海老原：一時間いるんだけど、20 分くらいで最初のお客さんは帰っちゃいますからね。どのくらい貸出があったかなあ。

石川：ステーションでは利用者登録などもできたのですか？

海老原：もちろんできます。借りる人は大人の方でも多い人はこんなにたくさん借りて。

石川：利用者さんはステーションまでは自転車などで来るのですか？それとも歩いて？

海老原：歩いての場合が多かったです。

石川：本を入れるカゴや袋などをお持ちになって……。

海老原：そうだったでしょうね。

…… (略) ……

中岡：利用者さんの変化などの実感はありますか？

海老原：最初はワーッと来るんです。非常に利用も多かったけど、だんだん少なくなっていった。いつごろからかだんだんとね。2 週間に 1 回しか来ないわけだから。

中岡：だんだん利用者さんは減っていったということですが、利用者さんの層というのはあまり変化がありませんでしたか？

海老原：あまり変わらなかったと思いますね。やっぱり小さい小学生ぐらいまでのお子さんと女性。

中岡：男性はなかなか時間的に借りられなかったということでしょうね。利用者さんは、借りにきてその場でずっと読んでいかれるということは無かったですか？

海老原：それはあまり無かったですね。基本的に貸し借りだから、終わったら帰ってしまうかな。

中岡：利用者さんとお話したりとかは？

海老原：それはありましたね。常連さんとかとお話したりね。

茂呂：「この本入りましたよ」とか？

海老原：そうですね。

中岡：当時の記録には紙芝居の貸出があったようなのですが、紙芝居を実演したりなどはされてましたか？

海老原：やった記憶はないですね。でも、紙芝居の枠はあったからやっていたこともあったのかな。ちょっと記憶はないけれども。

### 3. 和光市を走る「やまびこ号」

本稿では当時「やまびこ号」の巡回に携わった柳下氏と海老原氏へのインタビュー記録にもとづきながら、和光市の移動図書館「やまびこ号」の歴史について中間的な報告として整理した。これまでの調査により、多くの市民の要望によって移動図書館「やまびこ号」の巡回を開始するとともに、名称やテーマソング、ステーションの運営など、市民と行政・図書館員とがともに「やまびこ号」を創ったプロセスをみることができる。「やまびこ号」が、単なる図書館のサービスとして一方通行として地域を巡回していたのではなく、市民と共に活動しながら、市民生活の足下に巡回することで、地域全体で「やまびこ号」を受容していたことがうかがえる。

「やまびこ号」の調査研究については着手したばかりであるため、本稿によってみえてきた課題も多い。第一に、和光市における移動図書館請願活動を実証的に明らかにすることである。具体的には、建物の「図書館」とは異なり、「移動図書館」を求める市民の請願活動の目的や背景、さらには請願活動がどのように行われ、市内で移動図書館を求める機運が高まった過程な

どである。「やまびこ号」の出発点となった請願活動の実像を明らかにすることは、「やまびこ号」が目指した理念とともに、和光市において「図書館」がどのように期待されたのかを検討するうえで重要な意味を持つものといえよう。

第二に、和光市内における埼玉県立図書館による移動図書館「むさしの号」の巡回の歴史をたどることである。和光市では「やまびこ号」の巡回以前、1962年から「むさしの号」が巡回していた<sup>28</sup>。特に一日図書館「むさしの号」が和光市の西大和団地において開館式が行われたこと<sup>29</sup>を踏まえると、埼玉県立図書館による移動図書館「むさしの号」巡回の影響が大きかったことが推測できる。和光市内における「むさしの号」の巡回を明らかにすることは、市民が「図書館」に何を期待したのかを検討することに結びつけることができる。

第三に、ステーションの世話人をはじめ、移動図書館「やまびこ号」の巡回を支えた市民の存在である。とりわけ、和光市内には大規模団地が建設され、同時に市内に地域文庫や読書会活動が拡大した歴史もあった。当時のこうした読書活動の広がりや、公民館図書室や「やまびこ号」との関わりから、市民が「図書館」や「やまびこ号」に何を期待し、どのように支えていたのかを検討することができよう。

今後、「やまびこ号」に関わった方々へのインタビュー調査を進めていくとともに、行政文書をはじめとする資料調査を重ね、和光市の移動図書館「やまびこ号」の歩みを実証的に検討するとともに、移動図書館を媒介とした戦後地域社会形成を考察していきたい。

### 謝辞

「やまびこ号」に関するインタビューに快く応じてくださいました柳下昇様、海老原伸子様には深く御礼申し上げます。また、和光市教育委員会の茂呂あかね様、和光市図書館の小林理恵様、荒井京子様をはじめ皆様には、インタビュー

会場の提供や資料収集にご支援いただきましたこと、改めまして感謝いたします。

なお、本研究は十文字学園女子大学プロジェクト研究による成果の一部である。

#### 【註】

1. 「移動図書館」『図書館情報学用語辞典』第4版、日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編著、丸善、2013、p.9.
2. 『日本の図書館：統計と名簿2018』日本図書館協会、2019。なお同書では「自動車図書館」の台数が集計されている。
3. 日本図書館研究会オーラルヒストリー研究グループ編著『文化の朝はひかりから：千葉県立中央図書館ひかり号研究』日本図書館研究会、2017.;石川敬史「移動図書館成立の序論的考察：1940年代後半から1950年代前半における活動名称を中心に」『筑波大学教育学系論集』44(1)、2019.10、p.91-103.
4. 前川恒雄『移動図書館ひまわり号』筑摩書房、1988.
5. 日本図書館協会による『日本の図書館』の各年度を参照。
6. 鎌倉幸子『走れ！移動図書館：本でよりそう復興支援』筑摩書房、2014（ちくまプリマー新書、208）；石川敬史「移動図書館の再発見」『図書館雑誌』109(7)、2015.7、p.426-428.
7. 鬼嶋淳『戦後日本の地域形成と社会運動：生活・医療・政治』日本経済評論社、2019.
8. 森武磨編著『1950年代と地域社会：神奈川県小田原地域を対象として』現代史料出版、2009.
9. 鬼嶋（前掲7）や森（前掲8）による地域史研究の課題整理が大いに参考になる。
10. 大門正克『『生存』の歴史学』『第四次現代歴史学の成果と課題：新自由主義時代の歴史学』1巻、歴史学研究会編、績文堂、2017、p.206-221.
11. 大門正克『戦争と戦後を生きる』小学館、2009、p.18。（日本の歴史一九三〇年代から一九五五年、15）
12. 和光市総務部情報推進課編『統計わこう』平成30年度版、和光市、2019.
13. 和光市編『和光市史』通史編下巻、和光市、1988、p.762-777。もちろんこの他に、アメリカ軍基地の返還運動や基地跡地の利用計画の検討もあった。
14. 同上、p.822-824.
15. 川久保武子「親子読書会から移動図書館請願運動へ」『月刊社会教育』17(4)、1973.4、p.81-86.
16. 大門正克『語る歴史、聞く歴史：オーラル・ヒストリーの現場から』岩波書店、2017。（岩波新書、1693）
17. 本研究においては、インタビュー調査の実施に先立ち、十文字学園女子大学研究倫理審査委員会に対し「人を対象とする研究倫理審査申請書」を提出し、承認を得ている。
18. 『広報やまと』85、1966年11月1日
19. 『広報わこう』13、1971年5月1日
20. 前掲15、川久保。以後、本節では同文献を参照した。
21. 埼玉県公共図書館協議会編『くらしの中に図書館を：埼玉県公立図書館白書1973』1974、p.13-14.
22. 1972年1月に巡回を開始した大型バスを改造した移動図書館。積載数4,500冊で、埼玉県内500戸以上の中高層集合団地を中心に巡回した。1974年4月には2号車を建造した。1987年3月に巡回終了。
23. 前掲15、川久保。
24. 移動図書館が巡回し停車する場所を一般的に「ステーション」もしくは「駐車場」ともいう。
25. 埼玉県移動図書館運営協議会編『埼玉の移動図書館1977：市町村移動図書館実態調査』1977、p.28-29。なお、「やまびこ号」は2003年に廃止されるまでの間、2回更新されており、開始から廃止までの間に3代（台）の「やまびこ号」が製作されている。
26. 『広報わこう』78、1974年1月15日.
27. 『広報わこう』89、1974年7月1日.
28. 埼玉県移動図書館運営協議会編『埼玉の移動図書館：30周年記念』1980.
29. 埼玉県立図書館編『一日図書館車：満三年のあゆみ』1975.  
なかおか たかひろ（和光市）  
いしかわ たかし（十文字学園女子大学）